

生物リズム若手研究者の集い2011楽屋話

池上啓介¹⁾、伊藤浩史²⁾、西出真也³⁾、藤原すみれ⁴⁾、淵側太郎⁵⁾、吉種 光⁶⁾

¹⁾ 名古屋大学大学院 生命農学研究科 kegami.keisuke@c.mbox.nagoya-u.ac.jp

²⁾ お茶の水女子大学 アカデミック・プロダクション ito.hiroshi@ocha.ac.jp

³⁾ 北海道大学 大学院医学研究科 nishide@med.hokudai.ac.jp

⁴⁾ 産業技術総合研究所 fujiwara-s@aist.go.jp

⁵⁾ 岡山大学 大学院環境学研究科 oioitaro@cc.okayama-u.ac.jp

⁶⁾ 東京大学 大学院理学系研究科 stane@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

去る2011年8月6日、7日「生物リズム若手研究者の集い2011」という若手向けの合宿形式の研究会を岡山の地（岡山大学農学部・旅館乃利武）で開催しました。この研究会は昨年千葉で開催した「生物リズム夏の学校」という研究会の後継として今年も企画したものです。その時の様子は昨年「時間生物学会誌」で報告させて頂きました。

この研究会は昨年同様日本時間生物学会からのご後援を受けて開催されたものであり、私たち世話人一同感謝を申し上げます。今回も時間生物学会誌の誌面を頂きました。会の詳しいプログラムなどは研究会のHP (<https://sites.google.com/site/biologicalrhythm2011/>) を参照して頂くのが良いかと思えます。また学会誌本号で、久保さん、鶴飼さん、原さんが参加者代表として記事を書いてくださっています。

私たち世話人からは、どのような研究会を企画しようとしたか、その結果うまくいった点や反省点の一部を記そうと思えます。私たち世話人の楽屋話を記すことで、今後研究会を運営する機会がきっと訪れる私たちのような若手研究者の方々の一助になればと思っています。

2回目なので運営は楽？

この研究会の世話人6人のうち前回は世話人だったのは伊藤、西出、吉種の三人で残りの池上、藤原、淵側は今回新たに世話人となりました。昨年度の時間生物学会終了後、6人の世話人で集まり今回の研究会の開催の準備を進めていくことを確認しました。二回目の研究会を企画するので、昨年のノウハウをいかすことによりある程度事前の準備に慌てるような事は少なくてすむのではないかと、ということはこの時は期待していました。

東日本大震災と会場決定

結果としてこの目論見は外れました。例として世話人館のメールの数を数えてみるとほとんど変化がありませんでした（図1）。理由の一つとして、東日本大震災があげられます。一見関係がなさそうですが、未曾有の大震災は私たちの研究会へも影響を与えました。

3月中旬、私たちは昨年と同じ千葉市の東京大学セミナーハウスでの開催を計画していました。会場を同じにすることにより、準備の負担を減らし昨年度より手際よくやれるのではないかとこの考えによりここが選択されたのでした。震災直後の混乱が収まった頃、会場のセミナーハウスに連絡をしたところ、「現在計画停電の対象地域に入っていて、受付を停止している。今後の施設の利用の可否は白紙。」との回答でした。3月4月頃は停電により東京近郊の電車は慢性的に混み合っており、また多くの会社が休業していました。夏にはさらに大規模な停電があるだろうと予測されていて、原発の問題の規模やいつ収束するかも不透明でした。このような状況の中私たちは千葉での開催を断念し、世話人の一人（淵側）がいる岡山を開催地として新たに選定しました。

岡山は飛行機でも新幹線でも行きやすい場所ですし、岡山大学が街中にあり利用しやすい点も魅力的です。また日本の西側で開催することによって、関西圏・九州圏の方が参加しやすくなり、前回と違った参加者が期待できます。一方で東京から離れているために、やはり参加者がほとんど集まらないのではないかとこの点が懸念材料でした。

実際のところは、期待どおり62%の参加者が九州・関西圏を中心とした新規の参加者でした。また前回は定員を上回る参加申し込みがあり急遽参加登

録を締め切ったほどでしたが今回はそのような事は必要なく、最終的に全体で53名の参加者が集まりました。交通網が十分発達しているこの21世紀でも場所の効果がかなりあるということを思い知りました。ただし、個人の顔の見えるサイズとしてはこの人数は案外適当で、昨年よりも活発な議論がしやすかったという意見もありました。また岡山大学も宿泊場所も環境はととてもよく、落ち着いて議論する研究会に向いている場所であると感じられました。

研究会の名称

研究会の場所と共に今回変更したのが研究会の名称です。実は今回の研究会のタイトル「生物リズム若手研究者の集い」には、ポストドクや若手教員などの参加を促したいという意図がありました。これは、前回の「生物リズム夏の学校」という言葉からは、学生主体の会というイメージがあったので参加をためらった、という声を聞いたからです。(実際「生命科学夏の学校」など他の夏の学校は学生によって運営されているようです)それは私たちの本意ではありませんでした。

結局のところどうなったかと言うとあまり構成メンバーの身分に関しては期待したほど変化がありませんでした(図2)。研究会の名称は実際あまり本質ではなく別の要因で参加を決めているのかもしれませんが。

リズム若手研究者で集まる意義

今回の研究会では、参加者を時間生物学会に限らず、“リズムの若手研究者”という一点で人を集めました。研究会のHPにおいても以下のように記し多様性の確保に努めました。

リズム現象というキーワードは、様々な分野の人を引きつける魅力があります。扱っている生物種が進化的にかなり離れた物であっても、注目している遺伝子が全く違ったとしても、理解したいリズム現象そのものは本質的には近いはずで、(中略)リズム現象は細分化しがちなサイエンスの分野に共通言語を与えてくれるテーマだろうと思われま。

また、講演をしてくださる先生方も様々な分野からお呼びし、基礎的で重要なお話を頂くようお願いいたしました。

このような極めて広い分野の人が一つの場所に集まり会話をすることにどのような意味があるのか、これは全く自明ではありません。例えば植物の光周性の研究者とヒトを実際に扱う医学系の研究者が対

話することにどのようなメリットがあるのでしょうか。

このような多様性のある若手の研究会の存在意義に関して、2回ほど研究会を運営して気づいたことがいくつかあります。一つは、出来るだけ遠い分野の人の話を理解してみたいという気持ちを多くの方が持っているという事実です。前回に引き続きグループディスカッションの時間を設けました。これは参加者を6~7名のグループに分割して、各々の研究を紹介しあうという試みです。一人あたり15分程度の時間があつたのにもかかわらず、質問は常に打ち切らねばならないほど熱く議論が交わされました。

普段リズムという切り口で研究をやっていると、世の中にはたくさん研究分野があるのに、狭い分野に閉じこもっているような気分になることがあります。でもこうして集まってみると、狭く見えるのは錯覚で、自分が知らない手法や考え方は無数にあるのだということを感じられて嬉しいという声を参加者からききました。初対面の相手から質問がひっきりなしに続いたのは、背後にこのようなメカニズムがあつたのかもしれませんが。時間生物学会年会でもポスター発表の時間は十分用意されていますが、なかなかこうはいきません。実際自分の近い分野をいくつか見つけ、議論をしていたらあつという間に終わってしまうのが現状です。未知の分野の研究者の話をしっかり聞くという場はこれまで案外なかったかもしれません。

また普段サイエンスは私たちにとっては“する”ものとしてつきあっていますが、“楽しむ”という側面もあるはずで、普段は実験にいそしんでいる若手研究者も、リズムの話を肴に飲みながらとことん話してサイエンスを楽しむという報酬があつても良いのではないのでしょうか。

また、もう一つ気づかされた事は、多くの研究者が自分の発見を直接関係の無い分野の人に発信することにメリットを見いだしているという事実です。グループディスカッションでは、多くの方が今現在進行中の研究を丁寧に話して下さいました。自分も未だ手探りの事に関係ない分野の人に伝える利点は直接的にはないでしょう。研究室のセミナーで得られるような直ちに参考になる意見はほとんど期待できないかもしれませんが。しかし、異なる分野の初対面の人にわかりやすく伝えようとする、どうしても言葉を選ばないとはいけません。すると自分の発する言葉を介して自分の研究が冷静に客観視され、ど

うもなにか気づくことがあるようなのです。このようなメリットは、発表の機会が比較的に若い研究者にとっては大事なものと思われま

今後の計画

今回の研究会の解散後、希望者を募り岡山駅前の居酒屋で次回以降の計画について話し合いを行いました。

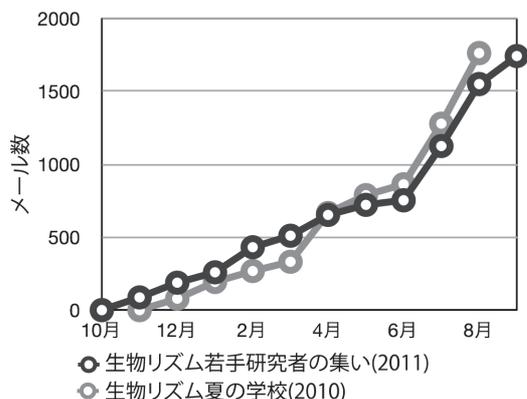


図1 世話人間メール数（累積）の推移

この研究会が来年以降継続するのか、また継続するとしたらどのように運営し、どのような形態をとっていくのかという点に関して話は出ましたが、まだほぼ未定であります。来年の会はまた新しい世話人の構成で今後一から計画をたてていくことになるでしょう。世話人として若手研究会の運営にご興味ある方はbiological.rhythms2011@gmail.comまでご連絡いただければ幸いです。

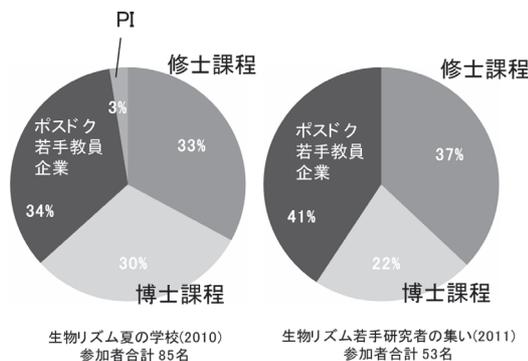


図2 参加者内訳

「生物リズム若手研究者の集い2011」に参加して

久保達彦

産業医科大学 医学部 公衆衛生学

少数であった臨床分野からの参加者の一人として、参加記を記すようご指名をいただきました。第一回開催の昨年を含め2度の参加を通じて感じたことを報告させていただきたいと思ひます。経験の浅い若手の雑感に過ぎませんが、ご容赦いただければ幸いです。

そもそも日本時間生物学会への入会のきっかけが、昨年の夏の学校に参加したことであった私にとって、夏の学校への参加は時間生物学会関連行事へのファーストコンタクトでした。夏の学校に参加して、まず驚いたことは参加者の研究対象の多様性でした。哺乳類実験動物はもちろん、鳥類、魚類、昆虫、植物、細菌、真菌、数学、物理、そして時々、ヒト。「共通点はリズムというキーワードのみ」の言葉に偽りはなく、時間生物学という名のもとに、これほど豊かな研究世界があることを知って

とても驚きました。暑い検見川からの帰り道、医学領域に閉じこもっていた自分の不明を知り、そして自分の仕事に有益な情報を山のように得て、上気した心持ちで帰宅の途についたことを今でも覚えています。岡山で開催された今年の夏の学校では、最初のプログラムは桑和彦先生と岩崎秀雄先生の対談でした。話題は科学に止まらずアートや社会時事問題にまで及び、その懐の広さには科学的刺激以上のものをいただきました。本間研一先生の時間生物の歴史を俯瞰するような講義や、初心者には大変ありがたい超入門講義などなど、プログラムは多様、かつ、それぞれのプログラムの意図が昨年に増して明確に打ち出されているように感じられました。講演後の質疑応答も自由な気風に満ちており、学術的質問から恋愛相談と思われるものまで議論は多彩でした。夕食後に開催されたグループディスカッ